

編集後記

『部落解放研究』三号ができた。本号は、小特集を二つ組んでいる。一つは、社会啓発と同和行政についてである。社会啓発と主体形成の問題、解放行政の問題、および行政現場からの報告である。調査研究や啓発活動を通して深い見識を持つ二人、また行政現場で先駆的な実践を行っている人の貴重な研究・報告である。いずれも社会啓発と同和行政の実践的・理論的な課題を衝くもので、そこに「壁」を突き崩す手応えがあると信じる。

二つ、歴史とアジア認識についてである。軍隊慰安婦問題への反発に対する実証的反駁、「満州」における日本人の他民族抑圧の批判、韓国人研究者による「満州」研究の紹介である。いずれも、日本人の歴史とアジア認識の原点を問うもので、とりわけ今日勢いづいている反動的言説の嘘を撃つものとして、時機に適っている。なお「満州」研究は、当研究所の研究会「部落解放と国際連帯」の活動成果である。

坪田論文は、日系ブラジル人の内世界に迫る試みとして興味深い。

しかし本号は、部落解放理論の批判と創造に関わる議論、自由主義史観等の政治反動の歴史認識の批判等、実践的にも緊要な課題を直截に扱う論文を収めることができなかった。

二号の編集後記に「部落解放運動をめぐる政治状況の激変のなか、研究活動の充実がますます緊要となつていふ」とある。本号の認識も然りである。研究所の研究活動が部落差別の現実に切り込み、その批判を闘いに投げ返す。これは研究所の生命線である。そのためには本誌の標的を広げ深めること、執筆陣のネットワークを広げること等、本誌に限っても課題は多い。

編集委員会では、本号の合評会を予定している。あらためて読者諸氏に呼びかけたい。
(青木)

